

ジョージ・クルックシャンクの 挿絵についての考察

浅木 尚実

(2011年10月14日受理)

要 約

ジョージ・クルックシャンクは、19世紀ヴィクトリア朝時代に活躍したイギリスの画家である。グリムの『ドイツ民衆物語集』の最初の英語版やディケンズの『オリヴァー・ツイスト』の挿絵で好評を得た。パノラマ絵本やオリジナルのグリム昔話等の子どものための挿絵に見られる動きのある時間と空間の表現形式は、現代絵本にも影響を与えている。しかし、高い技術力を有する画家という評価の一方で、「絵本においては二義的な存在」であると指摘されている。本論では、クルックシャンクの作風や作品の特徴を探ることによって、現代の児童文学史において、絵本画家としての評価を受けてこなかった要因を明らかにする。

キーワード ジョージ・クルックシャンク、諷刺、挿絵、絵本、グリム昔話

序 文

ジョージ・クルックシャンク (George Cruikshank, 1792 – 1878) は 19 世紀ヴィクトリア朝時代に活躍したイギリスの諷刺画家であり、また挿絵画家でもある。クルックシャンクは 1923 年にグリムの『ドイツ民衆物語集』(図 1) の最初の英語版に挿絵を付けたことから、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812 – 1870) の目にとまり、『ボブのスケッチ集』(1831) や『オリヴァー・ツイスト』(1837) の挿絵を依頼されることになる。又、*The Comic Alphabet* (1936) (図 4) や *The Comic Almanack* (1941) (図 7) で独自のパノラマ絵本も手がけている。これを契機に子どもの文学における挿絵の世界でも飛躍するかに見えた。しかし、挿絵画家としてのクルックシャンクには、高い技術力を有する画家という高い評価がある一方で、「絵本においては二義



図 1 : The George Cruikshank's Fairy Library

『復刻世界の絵本館—オズボーン・コレクション』
ほるぷ出版、1980

的な存在である」とか「ヴィクトリア朝時代の変人」いうマイナスの評価もつけられている。

本論では、クルックシャンクが、子どものためのグリム昔話やディケンズの挿絵で名声を得ながら、子どもの文学には受け入れられなかった要因をその作風や作品の特徴を探ることによって明らかにしたい。

第1章にて、諷刺精神に焦点をあて、子ども向きの昔話 *Hop O' My Thumb* (1853) における諷刺の強さ、その中でも特にアルコール批判について言及した。第2章では、その技法には近代絵本にも通じる特色があることを論じ、主に諷刺画「鼻」とパノラマ絵本 *The Comic Almanac, December* (1841)、及び大人向き諷刺画の連作 *The Bottles* (1847) の中から、その特徴を論じた。第3章では、本論でとりあげたすべての作品にグロテスク性が見られることに言及し、クルックシャンクの挿絵に関する特色についての考察を行った。

第1章 クルックシャンクの諷刺性

1. クルックシャンクの諷刺性

クルックシャンクの子どもの向きの挿絵の中で、特に昔話集の *George Cruikshank's Fairy Library* (1970) には、独特な特徴がある。それは、生涯にわたってクルックシャンクの中に潜んでいた諷刺精神である。子どもの文学の挿絵を描く時も、諷刺の手をゆるめることはなかったが、この昔話集に対しては、極端な諷刺が強すぎるという見方も根強く存在する。三宅は、英訳の『ドイツ民衆物語集』(1923) より後に描いた *George Cruikshank's Fairy Library* の4冊のシリーズについて、「昔話を使って禁酒キャンペーンをくりひろげており、ヴィクトリア朝時代の変人の一人としてよく引用されている」¹⁾ と述べている。こうした諷刺精神の背景ともなる彼の生い立ちから見ていきたい。

2. クルックシャンクの生涯

ジョージ・クルックシャンクは1792年に、ロンドンで生まれ、1878年にその生涯を閉じるまでの間、6～8千の作品を残したといわれている。父も兄も諷刺画家という環境の下、「諷刺画の揺り籠の中で育った」と自らも述懐するほど幼少時から既に絵筆の世界で非凡な才能を示していた。

1820年より、急進的な月刊誌 *The Scourge* を皮切りに、諷刺画を掲載するカリカチュリスト(諷刺画家)として活躍する。クルックシャンクは、木版やエッチングを用いた社会や政治を鋭くえぐる諷刺画家として一時代を築いていく。その後もクルックシャンクは、ジェームズ・ギルレイ (James Gillray, 1756～1815)、トマス・ロウランドソン (Thomas Rowlandson, 1756～1827) の後継者といわれ、政治や社会諷刺を手がける諷刺画家として、また、ナポレオンを題材としたことでも名声を得ていった。しかし、教義問答書や祈祷書をパロディにしたことで逮捕され、このことが後の彼の活動において出版の自由、人権尊重に拍車をかけていくことになる。ジョージ四世とキャロライン王妃の不仲を扱った諷刺画に対し、国王を諷刺の対象にしないように、皇室側は彼に100ポンドを与えたが、同意書を提

出した後も、政治や社会諷刺から手を引くことはなかった。1832年、悪性のアジア・コレラが流行した折にも、テムズ河の汚染に苦しむ人々の状況を憂慮し、水道設備不備の諷刺画を描き非難した。

クルックシャンクの諷刺画の中でも、酒害の恐怖を八枚に綴った版画 *The Bottles* は、1847年に驚異的な人気を得た(図10-17)。その内容は、ある幸せな五人家族が父のアルコール中毒の為に、家庭内暴力、末っ子の死亡、貧困、父の投獄と身を落としていく痛烈な酒害批判の諷刺画である。自らもかなりの深酒の習慣の持ち主であったとされるクルックシャンクだが、彼の酒癖の悪さに関して、ディケンズは次のように知人への手紙に記している。

クルックシャンクが先週の金曜日の晩、かなり酔っ払って訪ねてきました。一向に帰ろうとはせず、ようやく辞去したときには、朝の四時をまわっていました。それからどこへ行ったのかはわかりませんが、家に帰らなかったことだけは確かです。(1842年のディケンズの手紙より)²⁾

この手紙からも推察されるように、一晩中飲み明かし、早朝路上で泥酔の状態で見送られ、警察に保護されることもまれではなかったクルックシャンクが、酒害をテーマに描くことの意味は大きい。この一連の諷刺画 *The Bottles* は、1750年に描かれたホガースの「放蕩一代記」(1735)(図2)や「ジン横丁」(1750)(図3)から影響を受けたものとされているが、アルコールの習慣が民衆を蝕んでいた時代に、酒害を訴えた彼の諷刺精神が強く表れている。*The Bottles* を出版して以降、クルックシャンクは率先して禁酒運動家として活動していくことになる。

こうした過激なカリカチュアの精神を持つクルックシャンクの作風は、自ずと子どもの本の挿絵にも色濃く表れている。



図2：ホガース「放蕩一代記」
(大東文化大学経営研究所第四回経営シンポジウム「ホガース版画」図録)
<http://www.daito.ac.jp>



図3：ホガース「ジン横丁」
(大東文化大学経営研究所第四回経営シンポジウム「ホガース版画」図録)
<http://www.daito.ac.jp>

3. 子どもの本の挿絵と諷刺性

1853年挿絵入りの昔話を書き始めたクルックシャンクは、絵をつける過程において、筋を書き換え、禁酒主義的な教訓を盛り込んでいる。たとえば、*Hop O' My Thumb* (1853) (図 5.9) では、父親が酒で家財を失った伯爵という設定になっており、更正した父親は、最後には総理大臣に任命され、禁酒法を施行する結末へと物語の筋は大幅に変更されている。*Cinderella* (1854) でも、王子とシンデレラの婚礼の祝いの席で、国王は国中の酒を捨てさせる命令を下している。この他 *Jack Climbing the Bean Stalk* (1854)、*Puss in Boots* (1864) を含めた四編が、*George Cruikshank's Fairy Library* (1870) として出版されたが、この内容がディケンズを激怒させることになった。

ディケンズは『ハウス・ホールド』誌に、クルックシャンクが禁酒の思想を盛り込み、昔話を改作したことに対して、厳しく非難する論文を載せた。一方、クルックシャンクも親指小僧が書いたという想定の手紙でこれに意気盛んに応戦し、ディケンズとの溝を深めていく。その後、クルックシャンクとディケンズの不仲は、1871年に『オリヴァー・ツイスト』の原案は自分であるとクルックシャンクが『タイムズ』に投書したことで決定的となっていった。ディケンズとほぼ同時代に活躍していたにもかかわらず、ディケンズがクルックシャンクに『オリヴァー・ツイスト』以外の主だった仕事を依頼しなかったのも、こうしたクルックシャンクの過激な態度や自己顕示欲の裏に潜在した諷刺性が、ディケンズや当時の子ども観と調和しにくかったと考えられる。1830年代頃より、クルックシャンクの描くグロテスクなユーモアは、影を潜め、代わりにジョン・リーチ (John Leech, 1817～1784) のような節度ある笑いを描いた絵が好まれるようになっていく。ディケンズは、その後ユーモラスで上品な挿絵を描くリーチとのコラボレーションを好み、リーチに挿絵を依頼するようになる。挿絵画家は作家の書く小説の物語にあわせて絵を描くようになっていった。『パンチ』誌には、代表的な画家リーチをはじめとする画家の諷刺画が掲載されるようになり、クルックシャンクのような自己主張の強い諷刺画家は、挿絵画家の時代の到来の下で、自由奔放に諷刺精神を謳歌できにくくなっていくのである。

時代の波には逆らえなかったクルックシャンクであるが、挿絵という観点から見ると、近代の絵本に通じる別の価値が認められる。第2章では、クルックシャンクの挿絵の特色を見ていきたい。

第2章 挿絵の特徴

4 クルックシャンクの挿絵については、一つ目に挿絵の技術力の高さがあげられる。しかし、それが絵本作家にはいたらなかったという二つ目の評価も同時に存在する。一つめの挿絵の質の高さについて、児童文学研究者であるピーター・ハントは児童文学史におけるヴィクトリア朝時代の章で、「この時期の出版界で最も注目すべきことの一つに、さし絵の並外れた質の高さがあげられる。……ジョージ・クルックシャンクのような画家が、水準の高い作品を次々に出した」³⁾とクルックシャンクの挿絵の技術的な質の高さを絶賛している。日

本の児童文学研究の草分け的存在の神宮輝夫も、『ドイツ民衆物語集』について「原作の魂をつかんだ力強いさし絵入りで出版され、大きな反響を呼んだ」⁴⁾と高く評価している。

こうした一つ目の挿絵の仕事での高い評価とは異なり、イラストレーションの歴史研究家ブライアン・オルダーソンは、クルックシャンクと絵本とのかかわりは、*The Comic Alphabet* (1836) (図4) に力強い筆致が見られるものの、クルックシャンクの挿絵を絵本とは考えにくいという二つ目の見方を示している。

子どものための〈絵本〉に関するかぎり、ジョージは二義的な存在にすぎません。彼がグリムの『ドイツ民衆物語集』の最初の英訳本につけた画期的なエッチングや、バジーレの『ペンタメローネ』や彼自身の「妖精文庫」などの本につけた才気溢れる〔エングレーヴィングとエッチングの〕混合銅版画を、〈絵本〉と考えることは無理でしょう⁵⁾。

クルックシャンクの挿絵の中で、絵本のジャンルに近いパノラマ絵本 *The Comic Alphabet* (図4) や *The Comic Almanack* (1841) (図5) では、ABCの一文字ずつや暦の一月ごとをユーモラスに描くことに、成功はしているがストーリー性はない。しかし、一枚一枚の絵を丁寧に見ていくと、近代の絵本にも通底する特徴に気づかされる。

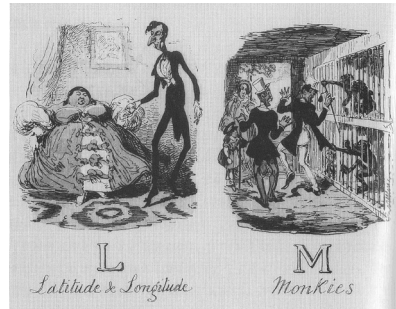


図4： *The Comic Alphabet*
p86、三宅興子『イギリスの絵本の歴史』
岩崎美術社、1995

2. 動きのある時間と空間

George Cruikshank's Fairy Library (1870) は、内容を改作した教訓色、諷刺性の強いものであったことについて、第1章で述べてきた。ここでは、挿絵の描かれ方に目を向けてみたい。この昔話集の挿絵には、繊細な中にも力強い登場人物の描写や文体以上の内容を表現する挿絵が数多く描かれている。ヴィクトリア朝諷刺画研究者である篠三知雄は、クルックシャンクの *Hop O' My Thumb* (1853) (図5) について次のように分析している。

‘The Giant Ogre in his Seven League Boots…’ では7リーグ長靴をはいた巨人がホップ・オ・マイ・サムと兄弟を追って山を駆け下りる姿は、大股を開いて空を飛んでいるようである⁶⁾。

巨人の天かける姿の下には、逃げまどい洞穴に隠れる兄弟家族が描かれ、スリリングな一場面を演出している。巨人の飛ぶ姿には、まさに飛翔する瞬間をカメラが捕らえたようなりアルな動きが表現されている。空間や時間の動きの構図については、絵本の絵を描写する際に最も大切な要素の一つである。絵本研究今井良朗は、1920年代のアメリカの絵本について次のように述べている。



図5 : George Cruikshank
— Hop-O' My-Thumb and the Seven-League
George Cruikshank' s Fairy Library,
David Bogue, London, 1953

この時期の絵本は、印刷の技術面での制約をあまり受けなくなったために自由に原画が描けるようになりました。のびのびとした自由な線で描かれた絵は、動きのあるダイナミックな画面を生み、絵を中心にストーリー展開させるようになります。絵本は、映画やアニメーションと同じように、動きのある時間と空間の中の表現形式として確立したのです⁷⁾。(下線は筆者)

クルックシャンクの他の挿絵の中にも、時間、空間を巧みに描いたものが少なくない。挿絵の基盤となるクルックシャンクの初期の諷刺画にも、踊り回る人々や斧を振りおろす人、太鼓を叩く人また人ばかりでなく、湯気や煙の動きの描写が、得意分野として登場し、「動きのある時間と空間」を表現したものが数多く見られる。「鼻」(図6)は、

十九世紀に描かれたとは思えないほどの輝きを放った構図を用いている。A Chapter of NOSES というタイトルの下には、様々なタイプの三十二人の鼻を左右対称に流れるように並べ、中央に長いトングで鼻を持ち上げられ宙づりになる男をフォーカル・ポイントに配している。周囲には、犬に鼻を噛まれて引っ張られる男や何者かに鼻を伸ばされる男、また求婚しあう巨大鼻のカップル、そして悪魔の鼻を引っ張る僧侶といったユニークな図像を散りばめ、唯一こちらを向いた男が、指を鼻にあてて、「これは秘密です」といわんばかりにウィンクしている。これは、現代のグラフィック・デザインにも通じるモダンな構図といえる。

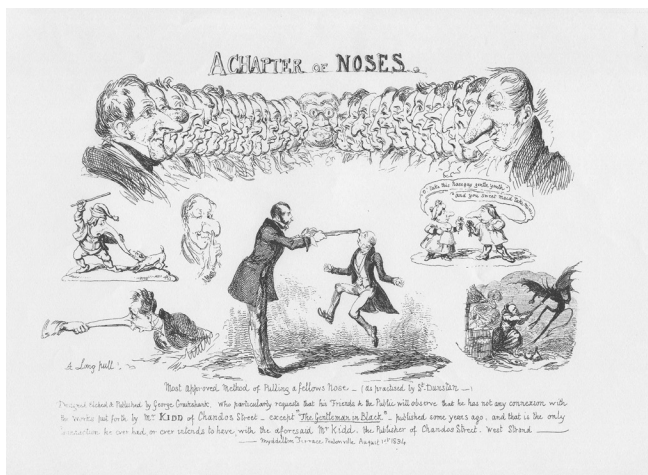


図6 : A Chapter of Noses From My Sketch Book
p.49、Richard A. Vogler, *Graphic Works of George Cruikshank*,
Dover Publication、New York, 1979

さらに、*The Comic Almanack* (図7) では、巨大な口の前には、目鼻のついたステーキやパン、プディング、七面鳥が長蛇の列を作り、あたかも次々とジャンプするかのように、飛び込む空間を中央に描き、下方にはコルク頭のついたアルコールのビンが自分たちも飲んでくれとばかりに体を傾けている。上方の飛んでいる燕がこの絵のタイトルである Swallows との掛けこと



図7 : *The Comic Almanack* December p.73, Richard A.Vogler, *Graphic Works of George Cruikshank*, Dover Publication New York, 1979

ばになっており、風になびく四隻のヨットの帆が全体の動きに拍車をかけている。このユーモラスで今にも動きだしそうな空間には、絵本表現における鋭いタッチと描写力が確認されるのではないだろうか。ここには、今井が、1920年代の「動きのある時間と空間の中の表現形式」の傑作と評した『100 まんびきのねこ』⁸⁾ (図8) に表現されたモンタージュ方式と類似した形式が見られる。

さらに、*Hop O' My Thumb* の表紙 (図9) には、巨人が肘をついて覗くように見下ろすすぐ下の部屋には、ベッドに眠る子どもたちの横でと相談する両親の絵が描かれ、さらにその下には、踊る子どもを置き去りにする両親の苦悩を表現している。この三場面を示す断面

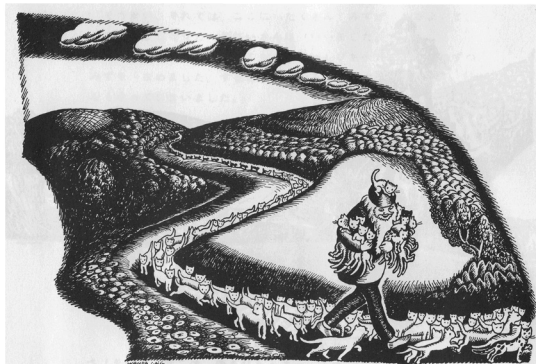


図8 : ワンダ・ガアグ『100 まんびきのねこ』
いしいももこ訳 福音館書店 1961 第10場面

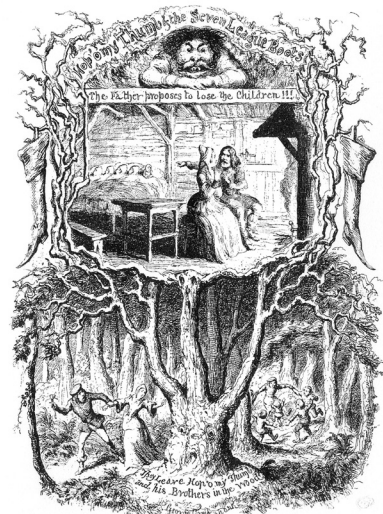


図9 : George Cruikshank
— *Hop-O' My-Thumb and the Seven-League*
George Cruikshank's Fairy Library,
David Bogue, London, 1953

図は、異時同図の構図である。タイトルページとして先を読みたくなる仕掛けとしては十分な魅力を備えている。

3. 連続的な展開—*The Bottles*

クルックシャンクは、*The Comic Alphabet* や *The Comic Almanack* で、コミカルなパノラマ絵本に挑戦したが、ストーリー展開の部分では未熟であった。絵本とは、絵と文章からなる連続した画面展開の中でストーリーが構成されていく構造をもつものと定義されるが、前述のクルックシャンクの *The Bottles* では、大人向けの諷刺画の連作の中に、その展開において絵本と共通する構造が見てとれる。笹本純は、絵本について、次のような制約があることを述べている。

絵本は限られたページの中で、ある一定の時間と空間を組織していかなければならないのです。時間と空間の連続的な展開も、読み手のページをめくる手にゆだねられます⁹⁾。

The Bottles の8枚の連作では、時間と空間の制約を受けながら、連続的なストーリー展開の表現を可能にした。大人向けの諷刺画ではあるが、8枚の絵がいかにストーリー展開を見せているかに注目したい。

図10から17の各場面は、路上の場面13と病院の場面17以外は、同じ部屋を舞台として変化を表している。裕福でしあわせだった家族が、父親のアルコール依存症のために、徐々に没落して不幸に陥っていく過程が描かれている。場面の下に著された文章を紹介すると次のようになる。（筆者訳：括弧内は、筆者の図像解釈）

第1場面（図10）：両親と3人の子どもの紹介。
（暖炉のある居間は調度品がほ
どよく配置され、下二人の子ど
もは遊び、親子の猫がたわむれ、
居心地のよい中流家庭の様子を
物語っている。）



図10：第1場面

第2場面（図11）：父親は、酒癖のために解雇され、母親は、酒代を得るために娘に衣類を質に入れるように渡している。
（暖炉の前では、泥酔した父親が座りこみ、下の二人の子どもは抱き合って怯えている。）



図11：第2場面

第3場面 (図12) : 差し押さえの役人がほとんどの家具を借金のかたに運び出している。酒で自らを慰めている父親。

(暖炉の前では、父親がそれを見ぬふりをしながら、グラスで酒を飲んでいる。)



図12 : 第3場面

第4場面 (図13) : 父親は、まだ職につけず息子が路上で物乞いをしている。これも酒代を稼ぐため。(父親は、酒屋の前で、財布を出している。その奥には、泣きながら物乞いをする息子が描かれている。)



図13 : 第4場面

第5場面 (図14) : 寒さと飢えのために末の子どもが亡くなる。父親はまだ酒瓶を手放せない。

(殺風景な居間で、家族は悲しみにくれている。)



図14 : 第5場面

第6場面 (図15) : 恐ろしいけんかが始まり、残忍な暴力が妻にふるわれる。度重なる酒量の増加の当然の結末か。

(妻や子どもの顔は恐怖にゆがみ、家具は倒され、床には穴が開いている。)



図15 : 第6場面

第7場面 (図16) : ついに酒瓶が凶器となり、夫は妻を殺す。

(大勢の人が居間に集まり、警察官が男を取り押さえている。)



図16 : 第7場面

第8場面(図17):酒は一仕事を終えた。赤ん坊と母親を殺した。娘と息子は悪行に身を落とし、救いのない狂人となった父のもとを去る。(場所は、鉄格子付きの病室に移り、身なりのよい娘と息子が冷たい目で、放心した父親を見ている¹⁰⁾。)

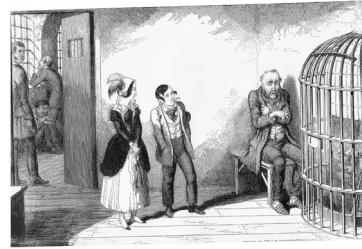


図 17: 第 8 場面

図 10 ~ 17: p.96-103、Richard A. Vogler, *Graphic Works of George Cruikshank*, Dover Publication New York, 1979
George Cruikshank: *The Bottles*

同じ部屋を舞台にしなが、酒代のために貧乏に身を落とし、家具や破れてひびが入る壁を表現しながら、どん底に落ちていく家族を浮き彫りにしている。一方で人物描写においても、表情、行動、服装等においての変化を際立たせ、8つの場面の連続した展開に成功している。絵のみを追ってだけでストーリー展開を理解でき、絵が語りかける物語性の強さを感じられる。暗い悲しいストーリー展開に、終始一貫して鋭いアルコールへの諷刺が貫かれているため、説得力に満ち、わかりやすい作品となっている。アルコールが人々を滅ぼしていく過程が現実のものとなって不気味に迫ってくる。この不気味でグロテスクな印象は、この家の主でもあり、アルコール中毒の張本人の象徴として、この連作におけるキー・ワードにもなっている。最後に狂人となって朽ち果てている姿には、グロテスクのイメージが凝縮されている。このグロテスク性は、クルックシャンクが諷刺画から挿絵に転向した後でも、薄れることのなかったもう一つの特徴である。

第 3 章 グロテスク性

1. グロテスクな魅力

クルックシャンクの挿絵の特徴として見逃してはならないのは、そのグロテスク性であろう。フランスの詩人シャルル・ボードレールは、エッセイの中で滑稽とグロテスクを比較し、グロテスクを「創造としての笑い」として上位に置き、クルックシャンクをグロテスクの画家として高く評価している。

10 ジョージ・クルックシャンクの特異な才能(彼の他の素質、表現の繊細さ、幻想的なものへの理解力などを抜きに考えると)は、グロテスクなもの尽きざる豊かさである。……グロテスクは、クルックシャンクの筆の先から、まるで生来の詩人の羽ペンから完全押韻が流れ出すのと同じように、無限に、とめどなく、流れ出るのである¹¹⁾。

グロテスクは、ローマ遺跡から発掘された洞窟部屋でその壁に奇妙な人間・動物が描かれ

ていたことに由来するが、クルックシャンクの得意とするところであり、前述の「鼻」(図6)を題材としたカリカチュアをはじめ、*Cruikshank's Fairy Library' Hop O' My Thumb* (1853)の巨人(図18)にもグロテスクな恐ろしさがにじみ出ている。また、動きの描写でも取り上げた *The Comic Almanack* の December (図7)も、ユーモアあふれる中にも、巨大な口に吸い込まれていく不気味さ、グロテスクな場面が描かれている。三宅は、クルックシャンクについて次のように評価している。



The Giant Ogre discovers Hop o' my Thumb & his Brothers
whom his Wife had endeavoured to conceal from him.

図18: Cruikshank, George.
Hop-O' My-Thumb and the Seven-League
George Cruikshank's Fairy Library,
David Bogue, London, 1953

クルックシャンクは、ディケンズ作品の最初のさし絵画家として知られているが、1823年版のグリム作品のさし絵をはじめとして、子どもの眼にふれることの多かった画家である。パノラマ絵本『コミック・アルファベット』(1836)や『歯痛』(1849)にみられる誇張されたおもしろさは、笑いながらも、内に秘めたグロテスクさも感じとることができ、年令をこえて愛読された¹²⁾。

クルックシャンクの挿絵は、高い技術力に支えながら、ユーモアにくるまれたグロテスクに対する人気も潜んでいたと考えられるのである。

2. まとめ

クルックシャンクは、現代においても、決して見劣りすることのないしなやかな動きをたたえた挿絵を残している。しかし、第1章で述べてきたように、その挿絵には、強い諷刺性が認められる。イギリスといえば、14世紀の『カンタベリー物語』をはじめとして多くの諷刺文学を生み出してきた国であるが、諷刺精神を含んだクルックシャンクの反逆魂は、時として子どもの文学にとっては、過剰に映る場合があったようだ。子ども向き挿絵による過度の諷刺、グロテスク、禁酒思想を盛り込むなど、当時の中産階級の教育熱心な大人の子ども観や価値観とはかなり距離があったことも予想される。

クルックシャンクの時代は、前半は諷刺画が隆盛であったものの、後半その流行に翳りが見え、諷刺画家は挿絵画家への転向を余儀なくされる時期でもあった。諷刺に富んだオリジナリティあふれる図像一本で勝負してきたカリカチュリストの彼にとって、一挿絵画家に転向することは、苦痛以外の何ものでもなかったであろう。作家の補足的な役割への転身に苦悩を隠しきれなかったクルックシャンクは、次第に陰を潜めていった。一方で、独自に昔話を改作して挿絵画家としての地位を誇示したかったのだろうか。子どもに語る昔話を素材に、あまりにも自己の思想を盛り込み、主張する創作の姿勢が、ディケンズとの論争を巻き起こ

してしまったとも考えられる。

しかし、挿絵の技法については、現代も新鮮さを失うことなく、輝きを放っており、そのこと自体は驚きに値する。挿絵の一枚一枚には、動きのある空間や時間の表現形式や連続する時間・空間処理には現代絵本のモニタージュ方式にも通じる優れた表現方法が使われていた。ランドルフ・コルデコット（Randolph Caldecott, 1846 - 1886）¹³⁾は、クルックシャンクより50年程あとに活躍した現代絵本の祖と言われている画家である。その技法はクルックシャンクが得意とした空間や時間の動きの構図を持つものであり、コルデコットがクルックシャンクに影響を受けていることが推察される。こうした技術は、絵本の表現方法として、以降大きく開花していくのである。

クルックシャンクの挿絵は、高い技術力に裏打ちされて諷刺やグロテスクの魅力とともに、現代に伝えられた。しかし、その過剰なまでの諷刺性やグロテスク性が、皮肉にも児童文学史から彼の名を遠ざけたものとする。

（本稿は、2009年度絵本学会発表のテーマを基に大幅に書き換えたものである。）

引用文献・注釈

- 1) 三宅興子『イギリスの絵本の歴史』岩崎美術社、1995、p.86.
- 2) 谷田博幸『ヴィクトリア調挿絵画家列伝』図書出版社、1993、p.67.
- 3) ハント・ピーター『子どもの本の歴史—写真とイラストでたどる—』さくまゆみこ、福本友美子、こだまともこ訳、柏書房、2001、p.204.
- 4) 瀬田貞二、猪熊葉子、神宮輝夫、『英米児童文学史』研究社、1971、p.98.
- 5) オルダーソン、ブライアン『六ペンスの唄をうたおう—イギリス絵本の伝統とコールドコット』日本エディタースクール出版部、1999、p.70.
- 6) 篠三知雄『ヴィクトリア朝の戯画と文学』三重大学出版会、2009、p.230.
- 7) 中川素子・今井良朗・笹本純『絵本の視覚表現—そのひろがりとはたらき』日本エディタースクール出版部、2001、p.3.
- 8) ガアグ、ワンダ『100まんびきのねこ』いしいももこ訳、福音館書店、1961
- 9) 中川素子、今井良朗、笹本純『絵本の視覚表現—そのひろがりとはたらき』日本エディタースクール出版部、2001、p.29-30.
- 10) Vogler, Richard A. *Graphic Works of George Cruikshank*, Dover Publication New York, 1979, p.96-103.
- 11) ボードレール、シャルル『ボードレール全集4』福永武彦編集、人文書院、1964、p.151-2.
- 12) 三宅興子『イギリスの絵本の歴史』岩崎美術社、1995、p.85-6.
- 13) 著名な編集者エドモンド・エヴァンズに見出されたイギリスの挿絵画家。『ジョン・ギルビンのゆかいなお話』を代表作とし、16冊の絵本を残し、現代絵本の父と評されている。流れるように動く行動の描写、人間や動物の巧みな性格表現、ユーモア溢れる挿絵は、好評を得、現代アメリカ絵本の最高峰「コルデコット賞」の源となっている。

参考文献

- Caldecott, Randolph. *Ride-a-Cock Horse and other Rhymes and Stories*, Everyman7s Library Children7s Claasics,London,1995
- Cruikshank, George. *George Cruikshank' s Fairy Library. — Hop-O' My-Thumb and the Seven-League Boots*, David Bogue, London, 1953
- Cruikshank, George. *George Cruikshank' s Fairy Library. — Cinderella and the Glass Slipper*, David. Bogue, London, 1953
- Fass, S. Paula, *The Encyclopedia of Children and Childhood: In History and Society*, Macmillan Reference USA, vol.1. 2003
- Leach, Robert. *The Punch &Judy Show—History, Tradition and Meaning*, The University of Georgia Press, Athens,1985
- McLean, Ruari. *George Cruikshank — His life and work as a book illustrator*, Art and Technics, London, 1948
- Nikolajeva, Maria • Scott, Carole. *How Picture Books Works*, Routledge, New York, 2006
- Orme, Nicholas. *Medieval Children*, Yale University Press, New Haven, 2001
- Speaight, George. *Punch & Judy A history*, Plays, inc., Boston, 1970
- West, Mark I. *Darl, Roald*, Twayne Twayne, New York, 1992
- Zipes, Jack. *The Oxford Encyclopedia of Children' s Literature*, Oxford University, London, 2006
- 阿部謹也『甦る中世ヨーロッパ』日本エディターズスクール出版部, 1978
- アリエス、フィリップ『〈子供〉の誕生—アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』杉山光信・杉山恵美子訳, みすず書房, 1980
- 池上俊一『遊びの中世史』筑摩書房, 2003
- カーペンター、ハンフリー・プリチャード、マリ『オックスフォード世界児童文学百科』神宮輝夫訳, 1999
- 川名隆史, 篠原敏昭, 野村真理『近代ヨーロッパ民衆生活史 路上の人びと』日本エディターズスクール出版部, 1987
- 佐藤彰一, 池上俊一, 高山博『西洋中世史研究入門』名古屋大学出版会, 2000
- タウンゼント, J・R『子どもの本の歴史』高杉一郎訳, 岩波書店, 1993
- 清水一嘉『挿絵画家の時代—ヴィクトリア朝出版文化』大修館書房, 2001
- 瀬田貞二, 猪熊葉子, 神宮輝夫『英米児童文学史』研究社, 1971
- 高橋憲夫, 石塚正英訳『諷刺図像のヨーロッパ史—フック版』柏書房, 1994
- 同志社女子大学編『ジョージ・クルックシャンク カタログ』同志社女子大学, 1995
- 富山太佳夫『笑う大英帝国』岩波新書, 2006
- 鳥越信『絵本の歴史をつくった20人』創元社, 1993
- 日本児童文学学会編『児童文学事典』東京書籍, 1988
- ハリソン, モリー『子どもの歴史』藤森和子訳, 法政大学出版局, 1996

ホジャード，M.『諷刺の芸術』山田恒人訳，平凡社，1970

松村昌家編『パンチ素描集—19世紀のロンドン』岩波文庫，1994

ミッチェル，M.D. リース，M.D.R.『ロンドン庶民生活史』松村超訳，みすず書房

三宅興子『もうひとつのイギリス児童文学史—パ誌とかかわった作家・画家を中心に—』翰林書房，2004

森洋子『ホガースの銅版画』岩崎美術社，1981

ライト，トーマス『カリカチュアの歴史—文学に現われたユーモアとグロテスク』幸田礼雅訳，新評社，1999